

犬の皮膚がんとは？悪性腫瘍や悪性黒色腫（メラノーマ）などの症状・治療方法を詳しく解説

愛犬は、家族の一員として大切な存在であり、平均寿命も年々、延びてきています。その一方で、犬の死因のトップにあげられるのが、悪性腫瘍＝がんだとされています。今回は、犬の皮膚がんや悪性黒色腫（メラノーマ）について、症状や治療方法などを解説してまいります。



悪性腫瘍（がん）とは

動物の体は、主に細胞によってできていますが、遺伝子の傷ついた細胞が発生することがあります。この細胞が無制限に増殖し、腫瘍を形成します。腫瘍には、良性と悪性の2種類があり、悪性腫瘍のことを「がん(癌)」と呼びます。

がんは、身体の様々な部位に発生する可能性があります。例えば、皮膚にがんが発生した場合には、しこりとなり、がんが進行すると腫瘍細胞が通常の健康な細胞の栄養を奪うため、体力の低下・食欲の減退などが起こり、どんどん弱ってしまいます。

なお、犬の2分の1が、がんで亡くなるとされるデータも発表されています。

悪性腫瘍（がん）の再発と転移

がんが他の病気と大きく異なる点として、再発と転移があります。がんは、一度治ったと思っても、再度、同じような場所に再発することがあるのです。

また、がんは最初に見られた箇所から、がん細胞が別の臓器などに移動して定着し、そこで再び増殖して腫瘍を形成する転移がみられる事例もあります。がん細胞は、血液やリンパに入り込んで、肺・肝臓・リンパ節などの体内の様々な箇所に転移していく危険性を持っています。

犬の皮膚がんの症状と診察方法

・犬の皮膚がんとは

犬の皮膚がんは、主に皮膚のしこりとして見つかります。皮膚は全身を覆っている器官であるため、身体の体表全般、顔、口、耳、足先、肛門付近など、様々な箇所に発症する特徴があります。

皮膚にできる悪性腫瘍は、軟部組織肉腫、脂肪腫、肥満脂肪腫、リンパ腫、組織球腫など、良性で害のないものから、悪性のものまで、いろいろな種類が見られます。

・症状

犬の皮膚がんは、しこりやイボのような形で、体表に発症することが多いです。もちろん、しこりやイボが見つかったとしても直ちにがんであるとは言い切ることはできず、良性の腫瘍であるケースもあります。

・診断方法

犬の皮膚がんの診断方法は、しこりやイボに細い針を刺し込み、組織を採取し、サンプル内の腫瘍細胞を確認することで行います。

その他、がんの進行度合いを調べるために、レントゲンを取って体内の状態を調べたり、超音波検査を行ったりする場合もあります。

犬の皮膚がんの治療方法

悪性の場合、手術で取り除くことにより、回復の見通しが立つケースもあるため、諦めずに治療を続けることが大切です。

ただし、足の指先など、手術を実施しにくい場所に悪性の皮膚がんが見つかった場合や、悪性度が高い軟部組織肉腫や、脂肪細胞種が見つかった際には、がんとその周囲を大きく切除する拡大手術を行ったり、手術後も抗がん剤による治療を継続したり、放射線治療の実施が必要にあることもあり、注意が必要となります。

悪性黒色腫（メラノーマ）

・悪性黒色腫とは

悪性黒色腫とは、メラノーマと呼ばれるもので、色素を作るメラニンを生成する細胞のメラノサイトが、がん化した腫瘍のことを指し、犬ではメスよりもオスの発症率が高いことで知られています。

メラノーマが多く見られる部位は、舌、眼瞼、眼球、口腔内の粘膜、足の指先などがあります。メラノーマは進行の早い腫瘍であるため、発見された時点で既に肺やリンパ節などの別の部位に転移している可能性もあるため、注意が必要です。

・治療方法

メラノーマを発見した場合、再発や転移を予防するために、腫瘍がある周辺の正常な組織ごと、外科手術によって摘出する方法を取ります。ただし、腫瘍の見られる部位によっては外科手術が難しい場合もあるため、その際には放射線治療を実施することもあります。

犬の皮膚にしこりやイボを見つけた場合には、皮膚がんの可能性もあるため、
早期に動物病院で獣医師の診断を受けましょう

今回は、犬の皮膚がんや悪性黒色腫（メラノーマ）について、症状や治療方法などを解説してまいりました。一言で犬の皮膚がんといっても、症状には様々な種類があり、治療方法についても違うことがお分かりいただけたのではないのでしょうか。

犬の皮膚がんは、場合によっては愛犬の命に関わる病気であり、転移や再発の危険性もあるため、なるべく早い段階で症状を発見し、原因を検査によって特定した上で、それぞれの症例に合った治療を適切に獣医師から受ける必要があることを忘れないようにしましょう。

ノミ・マダニに関する最新情報をチェック!

☎ LINE 公式サイト LINE@友達募集中 →

